

ノーベル賞 夢物語でない

解説
スペシャル

授賞式を前に、握手する根岸・米パデュー大特別教授(左)と鈴木・北大名誉教授。後方はカール16世グスタフ国王の写真(9日午後、ストックホルムで)。(奥西義和撮影)

米パデュー大特別教授の根岸英一さん(75)と北海道大名誉教授の鈴木草一さん(80)が10日、2010年のノーベル化学賞を受賞した。日本人初の受賞だった湯川秀樹博士のノーベル賞は、戦後間もない日本にとって復興と希望の象徴であった。世紀が変わり、国内外の情勢も移り行く中、2人の受賞は日本の針路にどんな灯標を示そうとしているのか。(本文記事1面)

■ 根岸 鈴木氏 化学賞受賞



2000年以降続々 ■ 学生・若手研究者に励み

ノーベル賞は、数少ない明るいニュースだった。自然科学分野の日本人受賞者15人のうち、10人は2000年以降に集中する。その実績は、1990年代までの日本のノーベル賞観を大きく変えた。学生や若手研究者にとって、夢

物語から到達できる目標となり、距離がぐっと近づいた。

今年のロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞を受賞した東京大学大学院博士課程2年の中村優希さん(25)は「シンポジウムなどで直接討論できる機会が

増え、受賞者がどう考え、努力したのか身近に感じられるようになったと話す。

近くなったといっても、受賞するには、幸運も欠かせない。

選考作業は、世界各国の推薦者から寄せられた数百人の候補者をリストに掲

ストックホルム市のコンサートホール。スウェーデン国王がメダルを手渡し授賞式は、21世紀に入り、日本にとって一段と身近な光景になった。経済の失速、政界混乱など暗い話題の多かったこの1年で、小惑星探査機「はやぶさ」帰還と、

物語から到達できる目標となり、距離がぐっと近づいた。

今年のロレアル・ユネスコ女性科学者日本奨励賞を受賞した東京大学大学院博士課程2年の中村優希さん(25)は「シンポジウムなどで直接討論できる機会が

増え、受賞者がどう考え、努力したのか身近に感じられるようになったと話す。

近くなったといっても、受賞するには、幸運も欠かせない。

選考作業は、世界各国の推薦者から寄せられた数百人の候補者をリストに掲

載することから始まる。誰が受賞にふさわしいのか、専門領域の研究者に調査報告書の作成を依頼。これに基づき、選考委員会がテーマと受賞者を3人以内に絞り込む。選考に賞金と同じや、西塚泰美・元神戸大学長(2004年没)、光通たかを真打ける。受賞した

「日本人が受賞すればよい」という時代ではない。各国の優れた研究者を集め、日本での共同研究が国際的評価を受けること、それが今後、日本の存在価値を支える大きな力になる」

◆2000年以降の日本のノーベル賞受賞者(敬称略)

| | | | |
|-------|------|--------------|---------------------|
| 2000年 | 化学賞 | 白川英樹 | 導電性ポリマーの発見 |
| 01年 | 化学賞 | 野依良治 | 触媒による不斉水素化反応 |
| 02年 | 化学賞 | 田中耕一 | 生体高分子の質量分析法 |
| | 物理学賞 | 小柴昌俊 | 宇宙ニュートリノ検出 |
| 08年 | 化学賞 | 下村脩 | 緑色蛍光たんぱく質の発見 |
| | 物理学賞 | 南部陽一郎(米国籍) | 自発的な対称性の破れ |
| | | 小林誠 | 対称性の破れの起源の発見 |
| 10年 | 化学賞 | 鈴木草一 根岸英一 | パラジウム触媒を使うクロスカップリング |

ノーベル賞の3人枠は、この10年間をみても、仏政府が「選考が不公平」と抗議したり、米医師が「自分こそ受賞する権利がある」と新聞広告を出したりするなど、波紋を広げることが多い。2008年に物理学賞を受賞した南部陽一郎さんも、04年には「南部の理論は時代が早すぎた」と異例の言及を受け、受賞を逃している。

化学賞選考委員のヤン・ベックバル・ストックホルム大教授は「4、5人に賞をあげられたらと思う年もある」と打ち明ける。今年の化学賞の授賞対象となったクロスカップリング反応も、日本のお家芸と言える分野で、多くの日本人が大きな貢献をしていただけに、誰が選ばれても不思議ではなかった。

先駆者の熊田誠・京都大名誉教授が07年に亡くなったこともあって、結果的に最初に絵を描いた人より、大きく発展させ、花開かせた人が評価された。

ノーベル賞は強烈な光を放つだけに、同じように優れた成果をあげても、選ばれた人と、選ばれなかった人の落差が大きい。科学や芸術での顕著な貢献に授与される文化勲章も、2000年以降の日本人ノーベル賞受賞者10人のうち7人は受賞決定の直後に受賞している。柴崎正勝・東京大名誉教授は「後追いでない日本独自の評価で、優れた研究者に光を当てていくべきではないか」と指摘する。

優れた成果 独自評価を

東北大名誉教授らも、有る力視されながら、3人枠から漏れてしまった。

受賞できなかった研究者の細胞の基礎研究で優れた業績を上げた増井禎夫・カマも含め、ノーベル賞級の人のナタ・トロント大名誉教授材の豊かさは、日本の科学技術がいかに底辺を広げ、西塚泰美・元神戸大学長(2004年没)、光通たかを真打ける。受賞した鈴木草一自身も「明治以来

の政府が科学に期待し、温かい目で育んできたその成果がようやく実を結んだ」と受け止める。

だが、行政刷新会議での「2番ではいけないのか」という指摘に代表されるように、最近の日本の研究環境は厳しさを増している。今年度の科学技術振興費は27年ぶりに減額された。研究の担い手の博士課程への進学者も減少傾向にある。

「短期的な成果ばかり求められ、若い人たちが大きな課題に挑戦しづらくなっている。将来に不安もある」と、阿部博之・元総合科学技術会議議長は懸念する。科学立国を標榜する日本は、どんな目標を掲げるべきか。2001年受賞者の野依良治・理化学研究所理事長が夢見るのは、日本人研究者が海外で活躍するだけでなく、外国人研究者が国内で研究して、それが評価されてノーベル賞を受賞することだ。